

『危険』と隣り合わせの現実

命を守るために改めて考えよう！！

西日本豪雨が発生し「指定されていた避難所が実は危険だった」という記事が新聞にて紹介されています。

私たちは、これまで防災士を中心にしながら、現地踏査行動を繰り返し行ってきました。

避難誘導マニュアルをもとに踏査を行ってみると『津波発生時利用不可』の箇所や線路よりも低く津波避難区域内の箇所が指定されていた事実も発覚しています。



現地踏査行動は、単に避難場所の位置確認が目的ではありません。「経路・箇所」に危険は存在していないか、「避難場所は適しているか」など、何が安全なのかを現地に立って検討・検証しています。

今後も「命を守るため」「感性・感覚・判断力を養うため」にも継続していくことが必要ではないでしょうか。

検証

西日本豪雨

3

7/23

住民の安全を守るはずの場所に、地鳴りとともに大量の土砂が押し寄せた。

広島県呉市の市立天応中学校は、市の指定避難所になっていたが、6日夜、裏のけが崩れた。幸い校舎も、中にいた約10人の住民も無事だったが、大きな岩や倒木でグラウンドが埋まり、市は使用を中止した。近所の女性(47)は娘や両親を車に乗せて学校に駆けつけたが、駐車場が職員に制止された。

「ここは危ない。別の場所に避難してください。」

道路は冠水や土砂崩れで寸断されていた。女性は車の中で不安におびえながら一夜を明かした。

なぜ、あそこが避難所だったのか。女性は市の防災計画に疑問を投げかける。

天応中は住宅街を見下ろす

危険だった指定避難所

山の中腹にあり、2012年に県が指定した土砂災害警戒区域内。以前から周辺住民の間で「大雨が降れば絶対に危ない」といった声が上がっていた。

市の担当者は「不安を持っている住民がいるとは知らなかった。本当に土砂崩れが起きると思っていなかった」と釈明した。

約50人が死亡した岡山県倉敷市でも、想定どおりに明らかになった。

市町村は、地震や土砂災害、洪水など災害の種類に応じて利用可能な避難所を指定している。倉敷市は以前から、小田川が氾濫した場合、真備町で広範囲に浸水すると想定。浸水区域内の学校などは洪水時の避難所の指定から外し、被害予想や避難所を記した「ハザードマップ」も住民に配布していた。

しかし、小田川北側の浸水被害が大きかった地域で、安全な避難所として指定してい



山の斜面から土砂や岩などが流れ込んだ天応中学校(22日、広島県呉市)。上申鉄撮影

たのは4か所だけで、収容能力は人口の20分の1。当日は避難所に入れない住民が数多く見られた。

自宅が浸水し、洪水時には使えない小学校に駆け込んだ住民も多数おり、「大雨と地震で避難所が違ふとは知らなかった」という声も上がった。市の担当者は厳しい表情で振り返る。「市民に危険を呼びかけておきながら、本当に起きた場合の準備が行政側でできていなかった」

防災計画を実効性のあるものにするために、どんな備えが必要なのか。近年、注目を集めているのが、大雨による土砂災害に特化した住民参加の訓練だ。

福岡県東峰村は15年から毎年、村民の約半数にあたる約1000人が参加し、避難所までの経路を確認する訓練を行っている。高齢者ら「要支援者」には、それぞれサポーター役の住民を任命。自宅から避難所まで連れて行っている。

「実際に避難所に行く体験をしなければ、いざという時に動けない」と、真田秀樹総務課長は強調する。

防災システム研究所(東京)の山村武彦所長は、こう指摘する。「平時から住民を巻き込まなければ、どんな計画も十分機能しない。地域が日頃から感じているリスクを拾い上げ、第三者からも評価を受ける。住民の意識を高めるには、それぐらいの真剣度を示す必要がある」

7月23日 読売新聞

現地踏査・検証行動を積み重ねて お客さま・仲間の命を守り抜こう！！